

平成24年度 第1回 高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時 平成24年9月14日(金) 14:00~17:00

場 所 高知県教育センター分館 大講義室

1 開会

- ◆教育長挨拶
- ◆人権教育推進協議会設置規程について
- ◆委員及び事務局紹介

2 協議

- ◆会長、副会長の選出
- ◆説明(人権教育課)
- ◆意見等
協議テーマ 自尊感情を育む教育の推進
 - ・自尊感情を育むための手立てや方策について
 - ・自尊感情を育むための学校や家庭・地域のあるべき姿について

(記号：協議会委員○、事務局●)

- 県教育委員会は、これまで4年間「学ぶ力を育み心に寄り添う緊急プラン」に沿って、学力・体力・運動能力の向上、いじめや不登校、あるいは暴力行為など、児童生徒の心の問題を解決するために緊急的・集中的に取り組んできた。その結果、学力向上に成果が見えたが、児童生徒の心の問題では、依然として厳しい状況にある。このような状況を踏まえて、今年度から教育振興基本計画重点プランを策定し、取組を始めた。この心の問題に関しては、従来、対症療法的に取り組んできたが、これからは、もっと踏み込んで予防的あるいは問題解決型の取組を進めていくことが大切だと考えている。その一つは、子どもたちの自尊感情をどのように高めていくかである。自尊感情が高まれば、学力・体力・運動能力などを支えるモチベーションの向上につながると考えている。今回の人権教育推進協議会では、県教育委員会の施策を通して、児童生徒の自尊感情を育むためにどのような支援ができるか協議していただき、意見や提言をいただきたいと考えている。

○各委員自己紹介

●事務局自己紹介・会長選出

○社会や世のなかで必要なことは、人の痛みが分かり、人のことが考えられる人をいかに増やしていくかだ。そのためには人権教育をさらに推進していくことが不可欠である。この推進協議会では、人の痛みが分かる、人の尊厳を守っていける、支えていける人を増やして行くためにはどうしたらよいかを協議する場としたい。

●(事務局より、推進協議会の方向性について説明)

○自己肯定感に関する他国との比較で、日本が極端に低いのはなぜか。分析結果などあるか。

- 正しい分析といえるかどうか分からないが、日本の子どもたちの内にある謙虚さが影響しているのではないか。また、日本の子どもたちは褒められることが少ない。そのことも結果に表れているのではないか。
- 別の分野で聞いたが、他国と比べて日本人はストレスを感じやすい、そのことも原因ではないか。
- 子どもの問題は大人の問題といわれる。教員や保護者がストレスを感じていたら子どももストレスを感じる。よいモデルを大人が示しているのか、考える必要がある。
- データでは、自尊感情の高い子どもほどいじめを止めることができてる。自尊感情と人権意識の関連性について学校現場から何か意見はないか。
- アンケート調査を分析した結果、友達が多い子どもほど自尊感情が高いことが分かった。仲間が多い子どもは、いじめられても助けてくれる友達がいるから止められる。従って、自尊感情が高い子どもがいじめを止めることができるのは、ある意味当然のことだ。
- 自尊感情の指標の一つに「自分にはよいところがあると思いますか」がある。平成24年度の調査では、その指標がすごく上昇している。今後、5ポイント上げる目標だが、この辺りをどうとらえているか。学力向上の取組が反映されたのか。
- 正直よく分からない。学力が上がったことも影響しているのではないか。ただ、ほかの要因もあるかもしれないが、今の段階でそれが何か分析することはできていない。提示した資料は、平成24年4月の段階である。23年度、1年間を通した別のデータでいくと、不登校あるいは暴力行為などは増えている。従って、その数字を工夫して見る必要がある。つまり、自分にはよいところがあると感じている生徒の割合が増えたけれども、一方で非常に苦しいお子さんの割合が増えたり、その状況が重たくなっている可能性もある。データの見方を単純に見ないように、いろいろな見方をしてみる必要がある。
- 「マズローの5段階欲求」において、自尊心の欲求は上位の欲求である。安心安全とか生理的な欲求が満たされないとその欲求に対して段階的に上がれない。自尊感情が高い子どもは、ベースの安心安全のところをしっかりしている。その一方で、暴力行為とか不登校とか虐待の問題でその欲求が満たされていない場合もある。
- 資料の暴力行為で生徒1,000人当たりの発生件数は増えているが、加害行為を行った児童生徒数は大幅に減少している。つまり、一人の児童生徒が起こす件数が増えている。発達障害の子どもに対する上手な対応ができていないことを意味している。また、いじめの問題は認知件数である。認知されればよいが、一番よくないのは認知できずに水面下に潜っていることである。資料を見るにあたっては、複眼的な視点で見えていく必要がある。
- 学力について、中学校は確実に上がっているが、小学校は一定的には上がっていない。どのように分析しているか。

- 中学校では、学力向上対策チームをつくり支援と指導を組織的に進めてきた成果ととらえており、小学校でもその観点でやっていただくことをお願いしている。
- 県立学校において27年度までに5ポイント具体的に上げていく質問項目に言葉の表現のあいまいな箇所がある。「今」とはいつの時点か、「誰とでも」もなかなか難しい。
- 質問項目の言葉の表現については今後考えていきたい。
- 各委員より、自尊感情を育むために取組んできた方策や、自尊感情を高めるためのあるべき姿についてご意見をいただきたい。
- 太平洋学園高等学校では、平成16年から新しい学校づくりに取組んできた。それまでは退学者が多く、課題対応は対症療法であった。その後、発達障害の研修等を行い、予防教育に力を入れるために人権教育を柱にした学校をつくらうとしてきた。自分が大事にされたことがない子どもは他人を大事にできないので、ここにいてもいい、今の自分のままでよいと思える取組や教員と生徒・保護者がつながる取組を進めてきた。また、体験をすることで気づき、学ぶことを考え、ボランティア活動にも注目し、現在、生徒の3分の1がボランティアサークルに所属している。コミュニティ協力隊というグループが立ち上がり、隣の公園を地域の人と整備する活動や防災などに取組んでいる。災害時に避難する際、地域の保育園や高齢者を包括した活動を考えている。褒められたことがない子どもが多く、排除された経験から、教師に不信感を抱いていた。地域の人から褒めてもらうことで子どもたちが落ち着きを見せ始めた。生徒一人一人が認められ、今のままそこにいてもいいと思わせることが大事である。徐々に自分が大好きと思って自立していけるように育てていきたい。
- 自尊感情を高めるためには、まず、子どもを取り巻く環境である学級、学校、先生、そして家庭、地域が子どものよさを認めてくれる環境でないといけない。その1つに、子どもの目線で子どもの立場に立って先生が指導すること。2つ目は、親が歩んできた経験からものを言うのではなく、同じ目線で対等な立場で接していくこと。3つ目は、子どもを先入観や固定観で見ないこと。4つ目は、子どもと共に先生も考え、共に高まろうという姿勢。さらに5つ目は、理屈ではなく心から心への伝達が大切である。これらが自尊感情、仲間意識、学力の向上につながると考えている。
- 要保護児童対策地域協議会に挙がってくる子どもたちのなかには、自尊感情、自己肯定感を獲得しにくい環境にいる。教育委員会や学校のみならず関係行政機関などの幅広い支援が必要であり、対策が必要である。
- 大変「きびしい」家庭、そして保護者とつながりづらい家庭にどのように支援していくか、考えなければならない。学校として精一杯やっていることを紹介するため、環境美化や人権環境などの整備、人権にかかわる広報文書を毎年4月に子どもと保護者に配付し、許されない行為を子どもに明示している。何を大事にしているかをまずしっかり示すと共に、先生は生徒の味方ということを手前に伝える必要がある。そして学校生活や授業のなかでは、「あいさつ」「今日の授業のねらい」「グループ活動」「何回褒めたか」を大切な視点としている。地域や職場体験、ボランティアなど「出会い」の場で大人に褒めてもらう機会やかかわりを多く設定している。

○地域に出向き、地域の人に認められ、褒められる機会が保障されることは、自分の存在価値を見つけていくことになるのではないかと。しかし、今の子どもや保護者は、自然や地域での活動の機会が少ない。子どもや保護者が体験できるような研修会を保障する必要がある。小さいときから地域に貢献する、ボランティア活動に参加するという状況を、私たち保護者から進んで示す必要もある。「体験の風」を吹かせていこう。

○幼児教育を継続的に推進し、社会教育(生涯学べる環境づくり)を通じてわが町を向上させたい。子どもを町全体で育てる視点で、子どもの読書のみならず、大人の読書も推進することをよいモデルの提示として取組んでいる。学校のなかに地域の人を送り込み一緒に授業を行ったり、子どもたちの支援をしてもらっている。褒めてもらうことを通して、家庭、学校、地域の関係を使い子どもや大人を育てていくことで、両者の自尊感情向上につながると考えている。目指す子ども像として、自分が好きと思えるのではなく、自分のことが好きだと胸を張って人の前で表現できる子どもをつくりたい。学校が楽しい、大事にされている、違いを認め合う、人権を大切にする態度・技能などを高めるには、保・小・中・高で一貫性をもってかかわることが大切である。ふるさとを担う人材養成を考えてもふるさとに居場所・職がない場合があるが、子どもの方から起業してふるさとを盛り上げていきたいという意見も出てきた。保育士・教師が保育園や学校で楽しんでほしい、子どもの成長を見て楽しみ、よい意味での遊び心をもってほしいといっている。ふるさとを大切に思う子どもは土佐町では95%の数値が出ている。夢や希望は88%という数値である。大人は70%台であり、大人も子どもと一緒に育っていくことを念頭におく必要がある。校外活動を県内に限定せず、土佐町では、学校管理規則を変え、県外でも体験学習が実施できるようにしている。今年は、香川県、徳島県で校外活動を行っている。

○定時制夜間部に勤務していたことがある。夜間部の高校生は入学当初は自尊感情が低く、褒められた経験がない子がいる。但し何でもかんでも褒めてもらいけるので、できたことに対してよくできた、やればできるねということが大事。人の役に立っていると実感したときに自尊感情が上がるのではないかと。また、「ありがとう」・「助かる」という声掛けなどを4年間行うことによって自尊感情も上がっていくと感じた。岡豊高校では礼節を重んじ、文武両道、厳しいなかにも温かみのある生徒指導を目指している。事あるごとに他者からの評価を生徒に伝えている。多数の生徒が部活動に入っているが、なかなかレギュラーにはなれないときに応援するような「態度」もすばらしいと生徒に伝えている。就職活動の自己アピールのとき、他者に挨拶ができ、粘り強く、誰とでもかかわれる生徒は、厳しい部活動の練習に耐えてきた生徒である。生きていくなかで大事な項目を80項目のなかから20、10、5項目など絞っていく勉強のなかで、「家庭・奉仕・両親」の3項目を5項目中に全員が答えていた。この結果を素晴らしいと生徒に伝えることも重要である。自分は何らかの役に立っていると感じさせることは重要であると最後に強調しておきたい。

○大きくなったときに何になりたいかと聞いたときに、20年くらい前にクラスで1～2名程度「わからない」「まだ考えてない」と答える子どもに出会い疑問を感じた。カエルや仮面ライダーなどでも構わないが将来へのキラキラ輝く気持ちがないことが気になった。また自信がない、大人の顔色をうかがいながら生活している子どもが最近では増えている。入園時の面接で、保護者に子どものよいところを聞くようにしている。きっかけは、自分の子どもの卒園式の時、「子どものいいところ、わからない」と答える保護者がいて、親自身が子どものよさを認められていな

いことに危機感を感じたからだ。うちの園では、子どもの心に響く認め方褒め方を考えている。子どもが褒められたいこと、子どもが気付いてないよい所を褒めることなど職員間で共通理解を図っている。プール納めで金メダルを渡すとき、自分のよかったこと、頑張ったことなどを発表するように促すと、人と比べてではなく自分の頑張りをみんなが自分の言葉でいえ、自分のことを自信をもって表現ができる子どもに育てていることに感激した。「目のまえにいる子どもは責任をもって接しよう」がうちのポリシーだ。子どもたちの個人目標を立て（個票を書いて）みんな確認する実践を1学期に1回行っている。自分のことが好きと思えると自信もでてくるが、親に認められることが少ないと自分が好きと思えないので、保護者との関係も重要だ。また、保護者は多様な価値観に翻弄されている。子どもと保護者を丸ごと受け止める姿勢で、指導からではなく受容からかかわっている。子どもを抱きしめられない、イライラする、カーツとなって首をしめたくなる現状を担任に打ち明けてくれることが大事で、保護者をまずは受け止めるようにしている。気になる家庭に対しては、夏休みなどは定期的に保護者に電話をしたり、何気なく家庭訪問をしたりしている。保護者をしっかり支援しないと子どもに気持ちを向けさせることができない。

○学校は、成功体験を量的に保障することが大切である。学級では、活躍する機会の保障、集団活動への参加と役割の保障が大切である。通常学級の教員は、多様な子どもがいることが前提の学級経営(授業のユニバーサルデザイン、通常学級における特別支援教育の推進)に努めなければならない。家庭では、受容が大事である。子どもの強さと弱さを理解してくれる保護者の存在が不可欠である。子どもの味方になってくれる保護者、子どもに付き合っといっしょに行動し、子どもが気付かないうちに独り立ちさせてくれるような保護者が大事である。そのためには、保護者が余裕をもって子どもに向き合えるような学校・地域の支援体制(全員を対象とした教育相談、学校における地域資源の案内の推進)が大切である。地域においては、見てくれている大人がいるという感覚(子どもが知っている人を増やす)を感じさせることが大切である。保・幼・小・中(・高)とずっと見守ってくれる地域、トラブルがあっても受け止めてくれる地域、人権感覚がある(障害を含めた差別意識がない)地域が大切である。そのためには、地域の子どもとかかわる機会の設定(自治会、老人会、PTAの会、学校との連携行事やコミュニティスクールや開かれた学校推進委員会など地域と連携した取組の相互参照)を大切にしなければならない。子どもの「しんどい」思いに対して共感し、時として子どもの気持ちの代弁をし、一緒にやっけて行こうというスタンスが必要だ。

○いろんな場面でその子のよさを引き出しながら、しっかり認めていくことが大切だ。地域の人たちを絡め、地域の人たちに認めてもらいながら子どもたちのよさを引き出し認め、伸ばしていくことも自尊感情を高めていくことにつながる。また、大人は子どものモデルであることから、大人の自尊感情を高める支援も必要だ。困難な状態にある子どもの多さから、自尊感情を育む前に、家庭環境の問題やその子たちへの支援の方策を考える必要がある。第2回では、学校環境への支援について、3回目では地域と家庭の問題に着眼しながら県教育委員会の支援について協議していきたい。

補足の意見や関連した意見はありませんか。

○個別に支援している子どもをどのように集団に返すのか。集団自体の受け入れ体制を構築していく必要がある。

- 実質的平等や様々な子どもがいることが前提での学級経営が求められる。
- 特別支援教育や発達障害なども含めた子ども理解を子どもにかかわる大人(家庭・保護者、学校・教員)は進めていかなければならない。

- 高校でも特別な支援が必要な子どもがいる。診断があり、服薬中の子どもの情報共有・共通理解をする会をもっている。ただし、高等学校の授業は一緒に行わなければならない。(抽出指導は認められない・支援室で落ち着くことはできる)
教員もへとへとになるときもあるが、管理職が支援的にかかわり、子どもの成長を実感するまで頑張れたら先生も成長する。そのことで子どもも成長する。

- 先生への(行政的)サポートも必要になるのではないか。

- 教員は子どもの心に寄り添える技量を持ち得ていない現状がある。褒め方、指導方法、発達障害や特別支援教育コーディネーターに関する知識など多くのことを伝えなければならないが、時間が十分にとれない。

- 高知海洋高校のPTAとして考えると「釣りばかりして勉強しない」と嘆いていた保護者が、子どもが賞をとると様子が一変し、自慢の子どもになった。子どもたちにいろんな体験の場をつくって何か勉強以外に誇れること、存在価値を認められることを保障することも重要ではないか。

- 地域と子どもがよい関係になるきっかけは「あいさつ」である。あいさつが活発になると、地域の対応が受容的になり、あいさつができないと批判的になる。

- 太平洋学園高等学校は、単位制であり、取り出し指導もできる。学校新聞に特別支援教育の意義と汎用性・共通性について2年間掲載し続けた。その結果、保護者が「異なった」生徒を排除せず、肯定的に見てくれるようになった。組織として1人の先生に抱え込ませない体制をつくるほか、保護者を含めて広く一般も対象にした研修会を実施したことも学校組織としての成功体験である。

- 次回以降は、県教育委員会の自尊感情を高めるための学校、学級経営、地域・環境づくりへの支援について協議したい。